

状糸球体硬化症の所見であったため、単純血漿交換 (PEx) を行う方針とし、1 回目は何事もなく終了。1999 年 1 月 26 日、第 2 回目の PEx にて非心原性肺水腫を生じ、人工呼吸管理、ステロイド剤投与にて軽快した。考案；ドナーおよび患者血清中に抗白血球抗体は証明されなかったが、本症例の肺水腫は新鮮凍結血漿 (FFP) による transfusion-related acute lung injury (TRALI) と考えられた。PEx では FFP の使用量が多いため TRALI を発症する危険性があり、白血球除去フィルターの使用や Cryosupernatant を使用するなどの工夫が必要と思われた。

5. 急性腎不全の予後は改善したか？

一山形大学 ICU における過去 15 年間の成績一

星 光*¹・篠崎克洋*¹・小鹿雅隆*¹・堀川秀男*²
山形大学医学部附属病院集中治療部*¹
同麻酔科蘇生科*²

【目的】血液浄化法を施行した急性腎不全 (ARF) について予後を検討する。

【方法】1986～2000 年に山形大学 ICU で管理した ARF 144 例について血液透析 (HD) と持続血液浄化法 (CHD) を比較し、1986～1993 年を前期、1994～2000 年を後期として予後を比較した。ARF 患者の重症度は APACHE-3 (APA 3) を用いた。

【結果】HD 症例は 22 例 (離脱 11 例、死亡 11 例)、CHD 症例は 122 例 (離脱 50 例、死亡 72 例) であった。APA 3 は HD で 71 ± 18 (離脱 63 ± 16 , 死亡 79 ± 17)、CHD で 92 ± 27 (離脱 75 ± 18 , 死亡 104 ± 26)。前期の CHD は離脱 26 例 (APA 3; 72 ± 17)、死亡 35 例 (104 ± 23)、後期は離脱 24 例 (77 ± 20)、死亡 37 例 (104 ± 30) であった。

【結論】持続血液浄化法により中等症以上の ARF の予後は改善したと考えられたが、年代別では明らかな改善は認められない。

6. 血管炎症候群による消化管出血に対する白血球除去療法

野口光徳*¹・原 右*¹・古田隆史*²・宮田正弘*²
田熊淑男*²

仙台社会保険病院消化器内科*¹、同腎センター内科*²

【背景】消化管出血のなかでも血管炎を起因とした症例は、難治再発性で大量出血により予後不良である。

【目的】血管炎関連消化管出血に対する白血球除去療法の治療効果を検討する。

【方法】生検組織などで血管炎と診断された 8 名、臨床的血管炎症候群とされた 12 名を対象として治療効果について検討をおこなった。

【成績】P-ANCA 陽性 6 例、全 20 例に CRP など炎症反応の亢進を認めた。内視鏡上、十二指腸から小腸にかけて縦列化したびらん出血を初期像とし、帯状潰瘍、広範囲の粘膜脱落を呈し、露出血管から動脈性出血を生じた。病理組織で、動脈系にフィブリノイド壊死を呈した血管炎と微小血管への血栓形成、多発性潰瘍を呈した。白血球除去療法により、炎症反応や ANCA の低下、消化管病変部粘膜の炎症改善を認めた。クリップ止血術の併用により内視鏡的止血を得られたが、白血球除去療法に反応が乏しい症例は、再発をくり返し、消化管切除術を必要とした。

【結論】白血球除去療法により、炎症反応や消化管病変の炎症改善を認め、血管炎関連消化管出血に対する治療に有効と考察された。

7. 活動期潰瘍性大腸炎に対する顆粒球除去療法の臨床的検討

斉藤慎二・千葉俊美・赤坂威一郎・猪股正秋
小穴修平・千島雷太・後藤ゆり・藤原隆雄
橋本康冬・部 寿樹・加藤智恵子・折居正之
鈴木一幸

岩手医科大学医学部附属病院第一内科

【目的】活動期潰瘍性大腸炎症例に対する顆粒球除去 (GCAP) 療法の有用性について検討する。

【対象】2000 年 4 月から 12 月の間に当科にて GCAP を試行した活動期潰瘍性大腸炎患者 6 例。男性 4 例、女性 2 例で、年齢 31 ± 7.5 歳、潰瘍性大腸炎重症度分類 (厚生省特定疫患消化吸收障害研究班、1986) では重症 2 例、中等症 1 例、軽症 3 例であり、罹患範囲は全大腸炎 3 例、左側大腸炎 3 例。病型は初回発作型 2 例、再燃緩解型 4 例であった。

【方法】それぞれの症例に対し施行されていたステロイドおよび 5-ASA 等の治療は継続したまま GCAP を併用した。GCAP は各症例につき週 1 回、合計 3～5 回施行し、施行前後における 1) 潰瘍性大腸炎重症度分類、2) Matts の内視鏡分類 (Grade 1～4)、3) Matts の生検組織分類 (Grade 1～5) を比較検討した。

【結果】1) 潰瘍性大腸炎重症度分類の変化：重症度分類にて軽症であった 1 例で緩解が得られたが、4 例は不変、1 例で増悪を認めた。2) 内視鏡分類の変